8/25

Hans GRAF

Conductor

ハンス・グラーフ

指揮

2001〜13年にヒューストン響の音楽監督を務め、その後、桂冠指揮者となった。これまでにザルツブルク・モーツァルテウム管、バスク国立管、カルガリー・フィル、ボルドー・アキテーヌ国立管の音楽監督を歴任。ウィーン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、バイエルン放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ロンドン・フィル、ロンドン響、サンクトペテルブルク・フィル、ボストン響、クリーヴランド管、ニューヨーク・フィル、フィラデルフィア管などを指揮。ウィーン国立歌劇場をはじめミュンヘン、パリ、ローマ、チューリヒなどのオペラ・ハウスに登場している。

モーツァルトとシューベルトの交響曲全集、デュティユーの管弦楽曲全集など数多くの録音があり、『ヴォツェック』(Naxos) は2017年グラミー賞を受賞した。

リンツ近郊に生まれ、グラーツの音楽院を経てイタリアでフェラーラとチェリビダッケに学び、ロシアでアルヴィド・ヤンソンスに師事した。ザルツブルク・モーツァルテウム大学でオーケストラ指揮の名誉教授を務めている。

Hans Graf was Music Director of Houston Symphony from 2001 until 2013 and then became the orchestra's Conductor Laureate. He also served as Music Director of Mozarteum Orchester Salzburg, Basque National Orchestra, Calgary Philharmonic, and Orchestre National Bordeaux Aquitaine. He has conducted orchestras including Wiener Philharmoniker, Royal Concertgebouw Orchestra, Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Gewandhausorchester Leipzig, Boston Symphony, Cleveland Orchestra, New York Philharmonic, and Philadelphia Orchestra. Graf also has appeared at Wiener Staatsoper and opera houses in München, Paris, Roma, and Zürich.

P Promenade

プロムナードコンサートNo.379
Promenade Concert No.379

サントリーホール

2018年8月25日(土) 14:00開演
Sat. 25. August 2018, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● ハンス・グラーフ Hans GRAF, Conductor
ピアノ ● カティア・スカナヴィ Katia SKANAVI, Piano
コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

モーツァルト：交響曲第34番 ハ長調 K.338 (21分)
Mozart: Symphony No.34 in C major, K.338

Ⅰ Allegro vivace
Ⅱ Andante di molto
Ⅲ Allegro vivace

サン＝サーンス：ピアノ協奏曲第2番 ト短調 op.22 (24分)
Saint-Saëns: Piano Concerto No.2 in G minor, op.22

Ⅰ Andante sostenuto
Ⅱ Allegro scherzando
Ⅲ Presto

休憩 / Intermission (20 分)

ドヴォルザーク：交響曲第8番 ト長調 op.88 B.163 (37分)
Dvořák: Symphony No.8 in G major, op.88 B.163

Ⅰ Allegro con brio
Ⅱ Adagio
Ⅲ Allegretto grazioso
Ⅳ Allegro ma non troppo

主催： 公益財団法人東京都交響楽団

後援： 東京都、東京都教育委員会

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年を年間500名ご招待)協賛企業・団体はP.65、募集はP.68をご覧ください。

YOUNG SEAT ヤングシート

Katia SKANAVI

Piano

カティア・スカナヴィ

ピアノ

©Gueorgui Pinkassov

モスクワ生まれ。ギリシャ系ロシア人の家庭に育ち、モスクワで英才教育を受け、パリ国立高等音楽院、モスクワ音楽院、クリーヴランド音楽院で学んだ。1989年ロン＝ティボー国際コンクール第3位、1997年ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールのファイナリスト。これまでにマズア、メニューイン、ズヴェーデン、フェドセーエフらの指揮で、ベルリン・ドイツ響、フランス国立管、シンフォニア・ヴァルソヴィア、サンフランシスコ響などと共演。ザルツブルク・カメラータ、モスクワ・ソロイスツ、クレメラータ・バルティカなどのソリストを務め、室内楽ではカヴァコス、バシュメット、クレーメルらと共演している。都響へは2009年に初登場、今回が2度目の共演となる。

Katia Skanavi was born in Moscow. She comes from a culturally rich Greek - Russian family. She began studies in Moscow at School for Gifted Children and studied at Conservatoire de Paris, Moscow Tchaikovsky Conservatory, and Cleveland Institute of Music. Skanavi won the 3rd prize at Concours international Long-Thibaud in 1989. She was a former finalist at Van Cliburn International Piano Competition in 1997. Skanavi is a favorite partner of musicians like Kavakos, Bashmet, and Kremer, and also has played as a soloist with Salzburg Camerata, Moscow Soloists, and Kremerata Baltica.

モーツァルト：
交響曲第34番 ハ長調 K.338

1779年から翌年にかけて、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）はザルツブルクで、第32番ト長調K.318、第33番変ロ長調K.319、第34番ハ長調K.338の３曲の交響曲を作曲した。それらの初稿はすべて３楽章形式で、メヌエット楽章を持たない点が共通している（第33番には後にメヌエット楽章が追加された）。その最後に書かれたのが第34番である。

第32番が全曲でわずか８分あまりと短く、また第33番がフルートとトランペット、ティンパニを欠いて規模の小さい音楽となっているのと比較すると、第34番は強弱の幅を広く用いて溌剌とした力強い響きを持ち、スケール感のある終楽章を備えていて、第35番以下のいわゆる「後期６大交響曲」の先駆けをなす作品とみなすことができる。

なお、この交響曲の場合、メヌエット楽章は書かれなかったのではなく、少なくとも一部を書いた後に破棄されたようで、その痕跡が自筆総譜に残存している。モーツァルトはおそらく1782年にウィーンで、同じハ長調による比較的規模の大きいメヌエットK.409を書いており、これを第34番のために新たに書き下ろされたものと解釈して、第２楽章と終楽章の間に挿入して演奏することがある。

第1楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　ソナタ形式。トランペットとティンパニを伴う力強く、行進曲調の第１主題によって開始される。第２主題はより歌謡的であるものの、多用される逆付点リズムが強い個性をみせる。主題の扱いに充実した筆致の窺える展開部の後、短縮された再現部、第１主題に基づくコーダと続く。

第2楽章　アンダンテ・ディ・モルト　展開部を持たないソナタ形式と解される。冒頭、第１・第２ヴァイオリンの間で歌い交わされながら始まる第１主題が特に印象的である。その愛らしい性格は第２主題にも共通する。

第3楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　ソナタ形式をとるが展開部は短い。８分の６拍子によるタランテラ舞曲のリズムをベースに、強弱の対比を強調した明朗ながら激しい性格の音楽が繰り広げられる。オーボエの活躍も音楽の明るい性格を際立たせている。

（相場ひろ）

作曲年代：1780年８月29日（完成）
公開初演：おそらく1780年９月２～４日の間　ザルツブルク
楽器編成：オーボエ２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、ティンパニ、弦楽５部（ヴィオラは２部に分かれることが多い）

サン＝サーンス：
ピアノ協奏曲第2番 ト短調 op.22

1868年、ロシアのピアニストで指揮者でもあったアントン・ルビンシテイン（1829～94）は、カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）にピアノ協奏曲の作曲を依頼した。ルビンシテイン自身は既にパリでピアニストとしてデビューし、大変な好評を博していたものの、指揮者として演奏会に出演する機会を持てていなかったために、自らが指揮を担い、友人のサン＝サーンスが弾くピアノと共演するために新作を所望したのだった。

サン＝サーンスはわずか3週間ほどで作品を書き上げ、初演にこぎつけた。楽譜上、独奏の比重が高く、管弦楽は比較的薄手に書かれており、後にジョルジュ・ビゼー（1838~75）が全曲をピアノ独奏用に編曲したほどであるが、これは作曲期間や想定されるリハーサル時間が短かったことと関連しているのだろう。

今日ではサン＝サーンスの遺した5編のピアノ協奏曲中、第4番と並ぶ人気作となったけれども、かつてはピアニストのジグムント・ストヨフスキ（1870～1946）によって「バッハに始まりオッフェンバックに終わる」※と評されるなど、手厳しい評価を下されもした。これは事大主義に陥ることなく、華麗なピアノ書法をユニークな、それでいて均整を保った構成の中に盛り込んだサン＝サーンスの、反ロマン主義的傾向が当時は理解を得られなかったためと思われる。

なお、独奏パートの低音域におけるオルガンを思わせる書法は、19世紀半ばにヨーロッパで流行した、脚で奏するペダル鍵盤を持つペダル・ピアノを想定したものと考えられる。

第1楽章　アンダンテ・ソステヌート　ソナタ形式。緩徐楽章を持たない代わりに、ここでは第1楽章が緩やかなテンポを採る。冒頭と再現部に長大なカデンツァが置かれるのが特徴的である。

第2楽章　アレグロ・スケルツァンド　スケルツォ楽章で、やはりソナタ形式による。ティンパニを伴う軽快な第1主題と歌謡的な第2主題の対比が興味深い。

第3楽章　プレスト　ソナタ形式。タランテラ舞曲風の、激しい動きを伴う楽章で、ピアノ独奏が大いに活躍し、華麗な技巧を披露する。

（相場ひろ）

※「空疎なエチュードに始まり軽薄なオペレッタに終わる」という意味が背景にある。この批判には、バッハとオッフェンバックに対する当時の価値観が反映されている。

作曲年代：1868年春

公開初演：1868年5月6日　パリ　作曲者独奏　アントン・ルビンシテイン指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

ドヴォルザーク：
交響曲第8番 ト長調 op.88 B.163

1884年、すでに国際的に高い名声を得ていたアントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、プラハの南西に位置するヴィソカー村に別荘を建て、翌年から、冬のシーズンを除いて1年の多くをここで過ごすようになる。ヴィソカー村の生活はドヴォルザークに精神的な落ち着きを与え、充実した生活の中で彼は円熟期の名作を生み出していく。

特に1889年はピアノ曲《詩的な音画》、ピアノ四重奏曲第２番、本日の交響曲第８番など、重要な作品が書かれている。彼自身、ピアノ四重奏曲を作曲中に友人に宛てた手紙で「溢れ出る楽想を書き留めていくのに手が追いつかない」と述べていることからも、この時期の彼の霊感の高まりが窺い知れる。

交響曲第８番は、このピアノ四重奏曲完成直後の８月26日に着手され、わずか１ヵ月足らずで全曲のスケッチを完了、ただちにオーケストレーションに着手して、11月８日に全曲が完成された。まさに霊感に衝き動かされるように作曲された交響曲といえよう。

この交響曲に見られる創造力の高まりは、筆の速さだけでなく、迸り出るようなボヘミア的な数々の楽想や、音楽の流れの勢いを感じさせるラプソディックな構成にも現れている。といっても決して勢い任せに書かれているわけではない。彼自身、この交響曲をこれまでにない「新しい手法」で作曲したと述べているとおり、この作品で彼は意識して独創的なスタイルと書法を試み、伝統的な交響曲の論理的な作法から離れて、湧き上がる楽想とラプソディックな展開を生かすような、民族的な交響曲に相応しい独自の論理的手法を追求しているのだ。一方で霊感の発露と、他方でそれをまとめる新しい書法の開拓とが結び付いてきわめてボヘミア色豊かな作品を生み出した点に、この時期のドヴォルザークの充実ぶりが示されている。

この作品の独自性の例として第１楽章第１主題を挙げよう。多様な楽想が次々現れるこの第１楽章の中でも最も主要な素材となるのが冒頭の２つの楽想、すなわちチェロ、クラリネット、ファゴット、ホルンのユニゾンによる哀愁を帯びたト短調の楽想と、それにすぐ引き続いてフルートが示す鳥の歌のような明るいト長調の楽想である。第１主題部はこの２つの全く異なる楽想によって形成されており、同主調の短調・長調の対比と楽想の変化を結び付けて気分の変化を生み出すこうした主題の構成法に、伝統的な主題作法とは違う独創的な発想が示されている。かかる長短三和音の自由な交替による気分の変転はスラヴの民俗音楽に通じるもので、民族性の表現を交響曲の様式のうちに盛り込もうとする綿密な意図がこの第１主題にはっきり窺える。

初演は1890年２月２日プラハでドヴォルザーク自身の指揮で行われて大成功を収めた。４月24日のロンドン初演もやはり彼の指揮でなされて大喝采を浴びてい

9/6

Antoni WIT

Conductor

アントニ・ヴィト

指揮

ポーランドで最も高く評価されている指揮者の1人。ポーランド音楽の重鎮として、ルトスワフスキ、シマノフスキ、カルウォヴィチ、ペンデレツキ、グレツキ、キラールなど幅広く取り組んでいる。

1971年カラヤン指揮者コンクールで入賞。ポーランド国立放送響音楽監督、ワルシャワ国立フィル総芸術監督を歴任。これまでにベルリン・フィル、シュターツカペレ・ドレスデン、チューリヒ・トーンハレ管、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、リヨン国立管、サンクトペテルブルク・フィル、クリーヴランド管、モントリオール響などを指揮。

EMIやソニー、Naxosに200以上のレコーディングがあり、『ペンデレツキ：フォノグラミ、ヤコブの目覚め、アナクラシス、ホルン協奏曲《冬の旅》他』（Naxos）は2013年グラミー賞を受賞した。

Antoni Wit is one of Poland's most highly regarded conductors, with a bold commitment to Polish music ranging from Lutosławski, Szymanowski, Karłowicz and Penderecki to Górecki and Kilar. A top prize-winner in Karajan Conducting Competition in 1971, he served as Music Director of Polish National Radio Symphony, and General and Artistic Director of Warsaw National Philharmonic. Wit has performed with orchestras including Berliner Philharmoniker, Sächsische Staatskapelle Dresden, Tonhalle Orchester Zürich, Orchestra dell'Accademia Nazionale di Santa Cecilia, Orchestre national de Lyon, Saint Petersburg Philharmonic, Cleveland Orchestra, and Orchestre symphonique de Montréal.

B Series

第860回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.860 B Series

サントリーホール

2018年9月6日(木) 19:00開演

Thu. 6. September 2018, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● アントニ・ヴィト Antoni WIT, Conductor

ピアノ ● シャルル・リシャール=アムラン Charles RICHARD-HAMELIN, Piano

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

ワーグナー：序曲《ポローニア》 (12分)

Wagner: “Polonia”, Overture

ショパン：ピアノ協奏曲第2番 ヘ短調 op.21 (32分)

Chopin: Piano Concerto No.2 in F minor, op.21

Ⅰ Maestoso
Ⅱ Larghetto
Ⅲ Allegro vivace

休憩 / Intermission (20 分)

ルトスワフスキ：交響曲第3番 (1983) (28分)

Lutosławski: Symphony No.3 (1983)

主催： 公益財団法人東京都交響楽団
後援： 東京都、東京都教育委員会
シリーズ支援：明治安田生命
助成： 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

Charles RICHARD-HAMELIN

Piano

シャルル・リシャール＝アムラン
ピアノ

©)Elizabeth Delage

2015年のショパン国際ピアノ・コンクールで第2位と同時にクリスチャン・ツィメルマン賞（ベスト・ソナタ賞）を受賞、一躍世界の楽壇に登場。様々な有名音楽祭に出演、またソリストとしても、多くのオーケストラと共演している。

P.サルドゥレスク、S.ライモン、B.ベルマン、A.ラプラントに師事。マギル大学（カナダ）、イェール大学（アメリカ）に学び、また両大学から奨学金を受けた。2016年にモントリオール音楽院を修了。現在は後進の指導に当たっている。

ファースト・アルバム『ショパン：ピアノ・ソナタ第3番 他』を2015年9月に、セカンド・アルバム『ケベック・ライヴ（エネスコ：組曲第2番／ショパン：幻想ポロネーズ 他）』を翌年秋にリリース（ともにAnalekta）。ともに高い評価を受け、前者はCBCの年間ベストテンに選ばれた。2016年5月の日本でのリサイタル・デビューは各地で絶賛され、今回は早くも6度目の来日である。

Charles Richard-Hamelin was Silver medalist and laureate of Krystian Zimerman Award for the best sonata at International Chopin Piano Competition in 2015. He has appeared in many prestigious festivals including Prague Spring Festival. As a soloist, he has performed with various ensembles. Richard-Hamelin is a graduate from McGill University, Yale School of Music, and Conservatoire de Musique de Montréal. His first solo recording was released in 2015 on Analekta label and received widespread acclaim. A second album released in 2016 received a very positive welcome.

ワーグナー：
序曲《ポローニア》

タイトルとなっている「ポローニア」とは、ラテン語あるいはイタリア語で「ポーランド」という意味。しかもポーランド語では、祖国を去って外国へ移住・亡命することとなったポーランド人も指す。

当時ポーランドは、ロシア、プロイセン、オーストリアの3大国に分割支配されており、ワルシャワはロシアの支配下にあった。1830年11月、ワルシャワ市民はロシアの圧政に対して立ち上がるのだが、翌年武力鎮圧されてしまう（11月蜂起）。

いっぽう1831年、リヒャルト・ワーグナー（1813～83）はライプツィヒ大学に入学して哲学などを学ぶと同時に、職業音楽家への道を目指し始めていた。そんな彼が知り合うこととなったのが、11月蜂起の失敗によって祖国から逃げてきた何人ものポーランド人だったのである。それがきっかけとなり、この序曲が生まれた。

じっさい「**アダージョ・ソステヌート**」と指定された序奏部からして、4分の4拍子、ハ短調の重々しい楽想を基調とし、悲しみや怒りに満ちている。ただしその狭間に8分の6拍子、ハ長調で、ポーランドの伝統舞踊であるマズルカやクラコヴィアークを彷彿させる部分も明滅するのが特徴。

主部に入ると一転してハ長調となり、快速テンポ（**アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ**）の中に「タタータ・タタータ」という音型……これは、ワーグナーの尊敬していたベートーヴェンが、勝利や解放を描く際に用いた音型である……による行進曲風の調べとなる。そこへ、序奏部でも出現したポーランドの民族舞踊風の旋律が加わって、ポーランド人の勝利に対する希望と賛美がこれでもかと謳われてゆく。

ウェーバーらドイツ・ロマン派からの影響の中に、ワーグナー独自の勇壮さやオーケストレーションが煌めく。情熱に溢れた若き日の彼が残した1曲である。

（小宮正安）

作曲年代：1832～36年
初　　演：1836年3月29日　マクデブルク　作曲者指揮
楽器編成：ピッコロ2、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、テナードラム、小太鼓、トライアングル、弦楽5部

ショパン：
ピアノ協奏曲第2番 ヘ短調 op.21

故郷のワルシャワを去り、音楽家として更なる飛躍を期していた若きフレデリック・ショパン（1810～49）。1830年に起きた11月蜂起に心を痛ませながらも、1831年6月にはウィーンの名門ケルントナートーア劇場で催された演奏会に出演する。演目

には、自作のピアノ協奏曲第1番ホ短調（出版の事情で「第1番」となっているが、本日演奏されるピアノ協奏曲第2番ヘ短調よりも後に作曲された）も含まれていたのだが、この時の楽器配置が面白い。ピアノは舞台の上、オーケストラは舞台の下にそれぞれ置かれていたのである。

つまり、ピアニストのワンマン・ショウといった様相に他ならない。当時は、超絶技巧のテクニックと超人的なカリスマ性で大向こうを唸らせる「ヴィルトゥオーゾ」と呼ばれる音楽家が人気であり、ショパンもそうした1人と見なされていたということだろう（ただしショパンは、自分がそうしたタイプの存在ではないと痛感しており、劇場やホールの大舞台より、サロンに代表される小さな空間での演奏を好むようになってゆく）。

興味深いのは、独奏楽器とオーケストラとの丁々発止としたやり取りが期待されてもおかしくない協奏曲ですら、当時はピアノがメイン、オーケストラがサブという作品が少なくなかったことである。ショパンが残した2曲のピアノ協奏曲については、オーケストレーションの貧弱さ、オーケストラの主張の薄さがしばしば指摘されるが、これもあくまで独奏者を引き立たせようとする当時の習慣が影響した結果といえるだろう。じっさいピアノ協奏曲第2番が初演されたのは、ショパンがピアニストとしてプロ・デビューを果たすという、ピアニスト＝ショパンを売り出すための演奏会だった（1830年／ワルシャワ）のである。

さらに当時は、主にサロンにおける演奏を念頭にピアノ協奏曲を編曲し、独奏版、2台ピアノ版、室内楽版に挑えることも盛んに行われた。となると、サロンでの演奏を好んだショパンが、協奏曲を書きながらも室内楽的な響きを志向し、その結果オーケストレーションが薄くなったという可能性も否めない。となると、ふだん協奏曲に期待しがちな「ピアノvsオーケストラ」という関係ではなく、煌めくピアニズムを中心とした室内楽としてこの作品を捉えることで初めて、当協奏曲の新たな魅力を再発見できるかもしれないのだ。

激しい情念をたぎらせた**第1楽章**（**マエストーソ** ヘ短調 ソナタ形式）、ワルシャワ時代の恋人への想いと別離の情を描いたと言われる**第2楽章**（**ラルゲット** 変イ長調 3部形式）、ポーランドの民族舞踊であるマズルカと、民族音楽のようなコル・レーニョ（弦楽器が弓の木の部分で弦を叩く奏法）も現れる**第3楽章**（**アレグロ・ヴィヴァーチェ** ヘ短調 ロンド形式）と、ショパンならではの曲想が、ショパンならではのピアノとオーケストラの関係の中で展開されてゆく、ショパンならではの協奏曲だ。

（小宮正安）

作曲年代：1829～30年頃
初　　演：1830年３月17日　ワルシャワ　作曲者独奏
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、バストロンボーン、ティンパニ、弦楽５部、独奏ピアノ

ルトスワフスキ：
交響曲第3番 (1983)

私の交響曲第３番はシカゴ交響楽団からの委嘱作品である。同楽団からは1972 年に委嘱を受け、その後間もなく私は交響曲のスケッチに着手したのだが、1983 年1月になってようやくスコアを完成させることができた。初演はゲオルグ・ショルティ指揮シカゴ交響楽団により、1983 年９月 29 日にシカゴにて行われた。

作品は短い導入部、２つの楽章、エピローグ、コーダで構成され、それらが切れ目なく続けて演奏される。第1楽章は3つのエピソードからなる。1つ目のエピソードは速く、２つ目は遅くなり、３つ目はもっとも遅い。基本となるテンポは変わらないが、リズム単位の引き伸ばしによって速度の違いを付けている。それぞれのエピソードの後には、短くゆるやかな間奏が続く。間奏はトッカータ風の主題群に基づいており、歌うような主題とはコントラストをなす。トゥッティの分断を繰り返して、作品全体のクライマックスへと導く。続く最後の楽章（編集部注：エピローグを指すものと解釈できる）は、ゆったりと歌うような主題に基づき、弦楽器群による短くドラマチックなレチタティーヴォが続く。短く非常に速いコーダによって作品は締めくくられる。

（ヴィトルト・ルトスワフスキ／飯田有抄訳）

Lutosławski:
Symphony No.3 (1983)

My Symphony No. 3 was commissioned by the Chicago Symphony Orchestra who as long ago as 1972 had asked me to write a work for them. Shortly after that, I wrote some sketches for the Symphony but only in January 1983 did I complete the score. The Premiere was given by the Chicago Symphony Orchestra conducted by Sir Georg Solti on 29 September 1983 in Chicago.

The work consists of two movements, preceded by a short introduction and followed by an epilogue and a coda. It is played without a break. The first movement comprises three episodes, of which the first is the fastest, the second slower and the third is the slowest. The basic tempo remains the same and the differences of speed are realised by the lengthening of the rhythmical units. Each episode is followed by a short, slow intermezzo. It is based on a group of toccata-like themes contrasting with a rather singing one: a series of differentiated tuttis leads to a climax of the whole work. Then comes the last movement, based on a slow singing theme and a sequence of short dramatic recitatives played by the string group. A short and very fast coda ends the piece.

Witold Lutosławski

(The text is published exactly as spelled in the original source.)

ルトスワフスキ：交響曲第3番 (1983)

ヴィトルト・ルトスワフスキ (1913 ~ 94) が生まれたとき、いまだポーランドはロシアの支配下にあった。翌年に第一次世界大戦 (1914 ~ 18) が起こると、続けてロシア革命 (1917)、ドイツ革命 (1918) が勃発。その流れで設立されたのがポーランド第二共和国であった［この時、首相に就任したのがショパンの演奏や楽譜の校訂で知られるイグナツィ・ヤン・パデレフスキ (1860 ~ 1941) だ］。

当時はカロル・シマノフスキ (1882 ~ 1937) がポーランド音楽を牽引していた時代。ピアノとヴァイオリンを習っていたルトスワフスキ少年も 11 歳のときに聴いたシマノフスキの交響曲第３番《夜の歌》(1914 ~ 16) に衝撃を受け、作曲を志したという。

1937 年にワルシャワ音楽院を修了するも、今度は第二次世界大戦 (1939 ~ 45) が起こる。戦中はナチスに、戦後はソ連に支配された環境のなか、ルトスワフスキは作曲家としての第一歩を踏み出さなければならなかった。戦中から苦労して書き続けた交響曲第１番 (1941 ~ 47) は社会主義に相応しくないとあっさり批判されてしまうも、ルトスワフスキ作品のなかでは現在も演奏頻度の高い《管弦楽のための協奏曲》(1950 ~ 54) が大きな成功を収めることで評価を勝ち得ていった。

ソ連の最高指導者スターリンが亡くなってから３年後の 1956 年に、後継のフルシチョフがスターリン批判を行い、いわゆる「雪解け」のムードが高まると、同年 10 月に現代音楽の音楽祭「ワルシャワの秋」が誕生。西側の前衛的な音楽が盛んに紹介されるようになり、それまでの鬱憤を晴らすかのようにルトスワフスキも最先端の現代音楽の流れへと身を投じた。

その結果書かれたのが、オクターヴ内の 12 の音すべてを同時に鳴らす《葬送音楽》(1954 ~ 58) や、《ヴェネツィアの遊戯》(1960 ~ 61) だ。後者はジョン・ケージ (1912 ~ 92) のチャンス・オペレーション（いわゆる「偶然性の音楽」）との出会いによって生まれたもので、この作品においてアレアトリー技法（いわゆる「管理された偶然性」）を確立。アレアトリー技法は拍子感なしに、似たような音色、似たような音型がずれて反復されることでモアレ状の響きを生み出す手法で、ルトスワフスキの代名詞となった。

1980 年代が近づくと、徐々に前衛芸術の勢いが低迷。最前線で活躍していた作曲家の多くが、それまでご法度としていた明快な旋律やハーモニーの要素を作品のなかに登場させ始める。ルトスワフスキにとってはオーボエとピアノのための《墓碑銘（エピタフ）》(1979) 以降の作品がそれに該当。最後の大作、交響曲第４

番（1988 ～ 92）に至るまで、前衛的な作曲技法と古典的な音楽をどう結びつけるかを思案し続けた。

交響曲第３番(1981 ～ 83)は、いわばこのスタイル変遷の過渡期に書かれたもの。戦後に書かれた数々の交響曲のなかで最も演奏機会の多い交響曲のひとつになり得たのは、晩年の諸作があまりに古典回帰に寄り過ぎているが故に批判の対象にもなったため。その点、本作は絶妙なバランス感覚で前衛と古典を結びつけた作品として評価が高い。

別掲のルトスワフスキ自身の解説（P.19）には、中身が細かいセクションに分かれていると説明されているが、それを楽譜なしに明確に聴き分けることは困難かもしれない。でもご安心いただきたい。本作を鑑賞するうえでは、作品冒頭に登場する「４音連打」ひとつを理解すれば、とりあえず事足りるからだ。この「４音連打」は、ベートーヴェンの交響曲第５番や、チャイコフスキーの交響曲第４番といった作品に登場する、通称「運命のリズム」とほぼ同じもの。明快で脅迫的な響きは、その直後に続く木管楽器を中心にした「アレアトリー技法」による曖昧でモヤモヤした響きとコントラストを生み出すことで、作品の前半の音楽を進めていく。

「４音連打」が単独で繰り返されるところからが作品の後半部となり、今度はベートーヴェンが交響曲第５番で動機労作を行ったように「４音連打」のリズムへ旋律的な動きを追加。徐々に単純な「４音連打」は姿を消していく。作品の終盤、ルトスワフスキ自身がエピローグと呼ぶセクションに到達すると、はっきりとホ長調的な響きが立ち昇り始める（初演者ショルティは、リハーサルの際に「ブラームスの交響曲のようにロマンティックに！」と指示を飛ばしている）。モアレ状の響きは後退し、明快な旋律線が登場。クライマックスを築き上げる。

（小室敬幸）

作曲年代：1981～83年
初　　演：1983年9月29日　シカゴ　ゲオルグ・ショルティ指揮　シカゴ交響楽団
楽器編成：フルート３（第２～３はピッコロ持替）、オーボエ３（第３はイングリッシュホルン持替）、クラリネット３（第２は小クラリネット持替、第３はバスクラリネット持替）、ファゴット３（第３はコントラファゴット持替）、ホルン４、トランペット４、トロンボーン４、テューバ、ティンパニ、シロフォン、小太鼓、タンブリン、ボンゴ、グロッケンシュピール、タムタム、大太鼓、チャイム、ヴィブラフォン、マリンバ、テナードラム、ゴング、サスペンデッドシンバル、トムトム、ハープ２、ピアノ（連弾）、チェレスタ、弦楽５部

©Shin Yamagishi

9/9

FUJIOKA Sachio

Conductor

藤岡幸夫

指揮

英国王立ノーザン音楽大学指揮科卒業。1994年「プロムス」にBBCフィルを指揮してデビュー以降、数多くの海外オーケストラに客演。オペラでも2006年に『ねじの回転』、2009年に『ナクソス島のアリアドネ』を指揮したスペイン国立オヴィエド歌劇場で脚光を浴びた。2016年にはブリュッセルでデュメイ、アファナシエフと共演。2017年にはアイルランド国立響にマーラーの第5交響曲で客演、聴衆総立ちの大成功を収めた。

マンチェスター室内管、日本フィルを経て、現在、関西フィル首席指揮者。毎年40公演以上を共演し2018年で19シーズン目を迎えた関西フィルとの一体感溢れる演奏は常に高い評価を得ている。番組の立ち上げに参画し指揮・司会として関西フィルと共に出演中のBSジャパン『エンター・ザ・ミュージック』（毎週土曜23:30）は、現在放送4年目の人気番組となっている。2002年渡邉暁雄音楽基金音楽賞受賞。滋賀県長浜市文化観光大使。2019年4月、東京シティ・フィル首席客演指揮者に就任予定。

Sachio Fujioka graduated from Royal Northern College of Music in Manchester. He became the first recipient of the Sir Charles Groves Conducting Fellowship. He has appeared with overseas orchestras on many occasions including his debut at the BBC Proms in London in 1994. He has been Principal Conductor of Kansai Philharmonic in Osaka and is now in his 19th season. Fujioka was the recipient of 2002 Akeo Watanabe Foundation Music Award.

都響・調布シリーズNo.20

Chofu Series No.20

TMSO

調布市グリーンホール

2018年9月9日(日) 14:00開演

Sun. 9. September 2018, 14:00 at Chofu Green Hall

指揮 ● 藤岡幸夫 FUJIOKA Sachio, Conductor

ピアノ ● イリヤ・ラシュコフスキー Ilya RASHKOVSKIY, Piano

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 op.18 (35分)

Rachmaninov: Piano Concerto No.2 in C minor, op.18

Ⅰ Moderato
Ⅱ Adagio sostenuto
Ⅲ Allegro scherzando

休憩 / Intermission (20 分)

ベートーヴェン：交響曲 第7番 イ長調 op.92 (38分)

Beethoven: Symphony No.7 in A major op.92

Ⅰ Poco sostenuto - Vivace
Ⅱ Allegretto
Ⅲ Presto
Ⅳ Allegro con brio

主催：公益財団法人東京都交響楽団
提携：公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

Ilya RASHKOVSKIY

Piano

イリヤ・ラシュコフスキー

ピアノ

1984年イルクーツク（ロシア）生まれ。98年ウラジーミル・クライネフ国際コンクール優勝。同年、ロストロポーヴィチ財団の奨学金を授与される。各地の音楽祭に招かれるほか、カッツ指揮キエフ響などと共演。

2001年ロン＝ティボー国際音楽コンクール第2位、2005年香港国際ピアノコンクール優勝、2007年エリザベート王妃国際音楽コンクール第4位、2011年ルービンシュタイン国際ピアノコンクール第3位、2012年浜松国際ピアノコンクール優勝。翌2013年には優勝者記念コンサート・ツアーが日本国内外で25公演開催された。

ハノーファー音楽大学でウラジーミル・クライネフに、エコール・ノルマル音楽院でマリアン・リビツキに師事。最新CDは『展覧会の絵』（La Musica）。パリ在住。

Ilya Rashkovskiy was born in Irkutsk in 1984. He studied at Hochschule für Musik, Theater und Medien Hannover with Vladimir Krainev and at École Normale de Musique de Paris Alfred Cortot with Marian Rybicki. Rashkovskiy is the 1st prize winner of competitions including Hamamatsu International Piano Competition (2012) and Hong Kong International Piano Competition (2005). He is among the top prize winners of Concours international Long-Thibaud (2nd Place), Queen Elisabeth Competition (4th Place), and Arthur Rubinstein International Piano Master Competition (3rd Place).

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 op.18

チャイコフスキー（1840 ～ 93）に連なるロシア・ロマン派の流れを引くセルゲイ・ラフマニノフ（1873 ～ 1943）は、当代きってのピアノの名手だったこともあり、優れたピアノ作品を数多く残している。そうした彼の作品の中でとりわけポピュラーなのがピアノ協奏曲第２番で、ロシア的な民族感情とピアニスティックな名技性が結び付いた彼らしい傑作として親しまれていることは今さら言うまでもないだろう。

彼は 1899 年にピアニストとしてロンドンを訪れ、成功を収めた。実はこの時、ラフマニノフを招聘した当地のフィルハーモニック協会は彼が新作の協奏曲を弾くことを要望していた。しかしこの時期、ラフマニノフは作曲の面では相当のスランプに陥っており、結局ソロ作品だけが演奏されたのだった。

スランプの原因は 1895 年に作曲した第１交響曲の初演(1897 年)の失敗にあった。彼は長引くスランプから脱すべく、1900 年の1月から４月まで精神科医ニコライ・ダーリ（1860 ～ 1939）の催眠療法を受ける。この治療のおかげでラフマニノフは立ち直り、夏にはピアノ協奏曲の作曲に本格的に着手、同年中に第２、第３楽章が書かれ（この２つの楽章は同年 12 月に私的初演された）、第１楽章は翌年完成された。全曲初演はモスクワで彼自身のピアノで行われて大成功を収めている。

第1楽章　モデラート　ハ短調　ロシアの鐘を想起させる独奏ピアノだけの重々しい和音で始まる。続いてヴァイオリンとヴィオラとクラリネットのユニゾンで現れる重く暗い情熱的な第１主題は、跳躍のないなだらかな旋律線が特徴で、ピアノがアルペッジョでこれを彩る。それに対して叙情的な第２主題はピアノが主役となる。展開部はピアノと管弦楽が拮抗しつつ激しいうねりを作り出し、再現部冒頭では朗々と第１主題を奏する管弦楽に対し、ピアノは展開部に出た新しい動機を強奏して、圧倒的な頂点を築く。

第2楽章　アダージョ・ソステヌート　ホ長調　ラフマニノフ特有の甘く官能的な叙情の支配する緩徐楽章。弱音器付きの弦による神秘的な序奏を受けてピアノがノクターン風に弾き始め、その上にフルートが主題を吹き、クラリネットが受け継ぐ。中間部は一転、落ち着きなく気分が揺れ動いて感情が昂ぶり、テンポも速まっていく。

第3楽章　アレグロ・スケルツァンド　ハ短調　ロンド・ソナタ風のフィナーレで、軽快な管弦楽にピアノの技巧的なパッセージが続く序奏に始まり、やがてピアノが力強い第１主題を奏する。第２主題は管弦楽が息長く表情豊かに歌い（その後半には第１楽章第２主題が組み込まれる）、ピアノに受け継がれる。この２つの主題が交互に現れ、ピアノと管弦楽との丁々発止のやりとりの中で、第１主題による緊迫したフガートをはじめ様々な展開が織り成され、大きく高揚していく。

（寺西基之）

作曲年代：1900～01年
初　　演：1901年11月９日（ロシア旧暦10月27日）　モスクワ
作曲者独奏　アレクサンドル・シロティ指揮
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽５部、独奏ピアノ

ベートーヴェン：交響曲第7番 イ長調 op.92

1808 年に交響曲第５番と第６番を完成させた後、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770 ～ 1827）はしばらく交響曲のジャンルから遠ざかる。交響曲に限らず、生み出す作品数そのものも一時期かなり少なくなっているのは、フランス軍のウィーン侵攻といった状況もあったようだが、動機労作による徹底した展開法とスケール豊かな構成を結び付けた中期の様式を究め尽くし、一方で聴覚の衰えが一層進行したことなどによる内面の変化が、彼を新しい作風の模索へ向けていったことも大きかったと思われる。

そして 1811 年終わりから 1812 年前半にかけて、ベートーヴェンはほぼ4年ぶりに交響曲の作曲に取り組み、交響曲第７番を生み出した（推敲は 1813 年初頭になされたようだ）。それは、中期に究めた動機の徹底的な展開法をリズム動機に応用し、一定のリズム・パターンに固執することでひとつの大交響曲を作り上げるという画期的な手法によるものとなった。リズムの持つ根源的な力を生かし、全体にわたって舞踏的ともいえる躍動性が横溢する作品で、リヒャルト・ワーグナー（1813 ～ 83）がこの交響曲を「舞踏の神格化」と評したことは有名である。

一方この時期のベートーヴェンは、中期における動機中心の隙のない緊密な構築法から離れて、伸びやかな旋律のカンタービレを重んじる傾向を示すようになっていた。交響曲第７番も、旋律はそうした性格を示しており、伸びやかな旋律性と躍動するリズムが結び付くことによって作品はきわめて明るい開放感に満ちたものとなったのである。このような舞踏的リズムと明快な旋律ゆえに、交響曲第７番は当時の聴衆からも直ちに受け入れられ、1813 年 12 月８日ウィーン大学の講堂で開かれた傷病兵義援金のための慈善演奏会における初演では、第２楽章がアンコールされるなど、大きな成功を収めている。

第1楽章　ポーコ・ソステヌート～ヴィヴァーチェ　イ長調　４分の４拍子による序奏が置かれているが、これは２つの楽想を持つきわめて長大なものである。やがて一転、付点リズムが木管で奏されて８分の６拍子によるソナタ形式の軽快な主部

9/22

Lawrence RENES

Conductor

ローレンス・レネス

指揮

マルタ系オランダ人指揮者。スウェーリンク音楽院、ハーグ王立音楽院で学ぶ。アーネム・フィル首席指揮者兼芸術監督（1998〜2003）、ブレーメン劇場音楽総監督（2001〜06）を歴任。2012年からスウェーデン王立オペラ音楽監督兼首席指揮者を務め、『イドメネオ』『トリスタンとイゾルデ』『ピーター・グライムズ』『トゥーランドット』『ばらの騎士』『イェヌーファ』などを上演した。同時代作品へ情熱を傾け、特にジョン・アダムズのオペラ『中国のニクソン』『ドクター・アトミック』は評価が高く、作曲家の厚い信頼を得ている。またジョージ・ベンジャミン『リトゥン・オン・スキン』のスウェーデン初演、タン・ドゥン『Tea: A Mirror of Soul』のアメリカ初演を行った。

これまでにベルギー王立歌劇場（モネ劇場）、ハンブルク州立歌劇場、イングリッシュ・ナショナル・オペラ、ネーデルラント・オペラ、サンフランシスコ・オペラなどに登場。またバイエルン放送響、シュターツカペレ・ドレスデン、ロンドン・フィル、オスロ・フィル、マーラー室内管、フランス放送フィル、N響などを指揮した。

Dutch-Maltese conductor Lawrence Renes is Music Director and Chief Conductor of Royal Swedish Opera. From 1998 to 2003 Renes was Chief Conductor and Artistic Director of Het Gelders Orkest, Arnhem, and from 2001 to 2006 he held post of Generalmusikdirektor of Theater Bremen. A champion of John Adams, Renes has conducted *Nixon in China* and *Doctor Atomic* and received great acclaim. He also conducted productions including the Swedish premiere of George Benjamin's *Written on Skin* and the US premiere of Tan Dun's *Tea: A Mirror of Soul*.

第861回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.861 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2018年9月22日(土) 14:00開演

Sat. 22. September 2018, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● ローレンス・レネス Lawrence RENES, Conductor
チェロ ● ジャン=ギアン・ケラス Jean-Guihen QUEYRAS, Violoncello
女声合唱 ● ヴォクスマーナ＊ Vox humana, Female Chorus
● 女声合唱団 暁＊ Akatsuki, Female Chorus
合唱指揮 ● 西川竜太 NISHIKAWA Ryuta, Chorus Master
コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

ナッセン：フローリッシュ・ウィズ・ファイヤーワークス op.22 (1993) (4分)

Knussen: Flourish with Fireworks, op.22 (1993)

武満 徹：オリオンとプレアデス – チェロとオーケストラのための (1984) (26分)

Takemitsu: Orion and Pleiades, for Cello and Orchestra

Ⅰ Orion オリオン
Ⅱ And と
Ⅲ Pleiades プレアデス

休憩 / Intermission (20 分)

ホルスト：組曲《惑星》 op.32 ＊ (52分)

Holst: The Planrts, op.32

Ⅰ Mars, the Bringer of War 火星、戦争をもたらす者
Ⅱ Venus, the Bringer of Peace 金星、平和をもたらす者
Ⅲ Mercury, the Winged Messenger 水星、翼のある使者
Ⅳ Jupiter, the Bringer of Jollity 木星、快楽をもたらす者
Ⅴ Saturn, the Bringer of Old Age 土星、老年をもたらす者
Ⅵ Uranus, the Magician 天王星、魔術師
Ⅶ Neptune, the Mystic 海王星、神秘主義者

当公演に出演を予定していた作曲家／指揮者オリヴァー・ナッセン氏が2018年7月8日にご逝去されました。代わってローレンス・レネス氏が指揮を務めます。ナッセン氏は当楽団と1994年に初共演。2015年9月には自作を含むプログラムで約20年ぶりの登壇を果たしました。突然のご逝去に謹んで哀悼の意を表し、1曲目をナッセン作品に変更して演奏いたします。

主催： 公益財団法人東京都交響楽団
後援： 東京都、東京都教育委員会
助成： 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年を年間500名ご招待)協賛企業・団体はP.65、募集はP.68をご覧ください。

YOUNG SEAT ヤングシート

©Marco Borggreve

Jean-Guihen QUEYRAS

Violoncello

ジャン＝ギアン・ケラス

チェロ

モントリオール生まれ。リヨン国立高等音楽院、フライブルク音楽大学、ジュリアード音楽院で学び、1990〜2001年にアンサンブル・アンテルコンタンポランのソロ・チェロ奏者を務めた。レパートリーはバロックから現代まで多岐にわたり、ウィーン楽友協会、コンセルトヘボウ、ウィグモアホール、カーネギーホールなど世界の著名ホールに出演。欧米およびアジアの主要オーケストラと共演を重ねている。フライブルク音楽大学教授。

Jean-Guihen Queryas was born in Montréal. He studied at Conservatoire de Lyon, Hochschule für Musik Freiburg and The Juilliard School. From 1990 to 2001 he was the Solo Cellist of Ensemble Intercontemporain. He has performed in celebrated concert halls around the world and appeared with leading orchestras of Europe, America, and Asia. He is a professor at the Hochschule für Musik Freiburg.

NISHIKAWA Ryuta

Chorus Master

西川竜太

合唱指揮

1972年生まれ。東京藝大在学中、声楽科有志と共に、1人1パート編成の声楽アンサンブル「ヴォクスマーナ」を創設し、指揮者に就任。クール・ゼフィール（男声）、空（くう）（混声）、暁（女声）の指揮者。成蹊大学混声合唱団常任指揮者。都立総合芸術高校音楽科講師（合唱）。音楽の新しい時代の創造を目指し、作曲家と協力して170作品を初演。2018年 第30回ミュージック・ペンクラブ音楽賞（クラシック「現代音楽部門」）を受賞。

Ryuta Nishikawa was born in 1972. While studying at Tokyo University of the Arts, he founded a vocal ensemble Vox humana, in which each singer takes charge of a single part, and he became the conductor of the group. He also serves as a conductor of Choeur Zephyr (male chorus), Ku (mixed chorus), and Akatsuki (female chorus). He is Resident Conductor of Seikei University Mixed Chorus and works as a chorus instructor at Tokyo Metropolitan Senior High School of Fine Arts.

Vox humana

Female Chorus

ヴォクスマーナ

女声合唱

1996年、西川竜太の呼びかけにより、東京藝大声楽科有志で設立された1人1パート編成の声楽アンサンブル。声による新しい音楽創造の可能性を探求し、年2回の定期演奏会を開催。2001年より、新たなレパートリーの創造と確立を目指し、新作委嘱を続け、これまでに100作品を初演。横浜みなとみらいホール主催Just Composed 現代作曲家シリーズ、日本作曲家協議会や日本現代音楽協会の主催演奏会などに出演。

In 1996, following Ryuta Nishikawa's call, Vox humana was founded by students of Department of Vocal Music of Tokyo University of the Arts. Each member of Vox humana takes charge of a single part. Exploring possibilities of new music creating through voices, the group holds regular concerts twice a year. Since 2001, Vox humana has commissioned composers to write new works to expand its new repertoire and has premiered 100 works so far.

Akatsuki

Female Chorus

女声合唱団 暁

女声合唱

2007年、都立芸術高校（現 都立総合芸術高校）音楽科卒業生により結成。これまでに、数多くの作曲家の27新作を初演。2011～16年「湯浅譲二・松平頼暁 合唱作品による個展」、秋吉台の夏2013「現代音楽セミナー&フェスティバル」招待演奏会に出演。『柴田南雄とその時代 第三期』『近藤譲／合唱作品集』『伊藤弘之／合唱作品集』CD録音に参加。

Akatsuki was founded by graduates of the Music Department at Tokyo Metropolitan High School of Music and Fine Arts (present Tokyo Metropolitan Senior High School of Fine Arts, Performing Arts and Classical Music) in 2007. To this day, Akatsuki have given new premieres of 27 works by many composers. The group appeared in the invitation concert of Contemporary Music Seminar & Festival in Akiyoshidai's Summer 2013. Akatsuki joined the recording of CDs including *Minao Shibata and His Era vol.3*, *Jo Kondo Choral Works*, and *Hiroyuki Ito Choral Works*.

ナッセン：
フローリッシュ・ウィズ・ファイヤーワークス op.22 (1993)

本公演に指揮者として登場するはずだったイギリスの作曲家、オリヴァー・ナッセン（1952～2018）だが、残念なことに７月８日に急逝した。彼の作品の中で特に親しまれているものに、アメリカの絵本作家モーリス・センダック（1928～2012）の台本によって 1980 年代に書かれた２つの児童オペラ『かいじゅうたちのいるところ』と『ヒグレッティ・ピグレッティ・ポップ！』がある。ナッセン自身によると、この２作に集中した後、疲れ果てて２年ほどは作曲する気もほとんど失せたという。

そして作曲を再開するにあたって、自作を含めた大きな構造の作品に嫌悪感を覚えるようになっていた彼は、大作ではこぼれ落ちてしまう大切なものがあると考えて、数分の間に創造的な世界を現出するように緻密な小品の創作をめざす。彼にとってそうした小品の模範のひとつがストラヴィンスキーの《花火》(1908) であり、この《花火》へのオマージュとして《フローリッシュ・ウィズ・ファイヤーワークス》は書かれた。作曲は 1988 年夏で、マイケル・ティルソン・トーマス（1944～）のロンドン交響楽団首席指揮者就任の演奏会のために書かれ、同年９月このコンビで初演された。その後 1993 年に改訂がなされている。

曲はストラヴィンスキーの《花火》に通じる手法を活用しつつ、主題としてはロンドン交響楽団（LSO）とマイケル・ティルソン・トーマス（MTT）のイニシャルに基づく音型イ（La）－変ホ（eS）－ト（sOl）－ホ（Mi）－ロ（Ti）－ロ（Ti）が様々に用いられていく。煌めきに満ちた色彩、めくるめく響きの変化など、ナッセンの冴えた筆致が光る鮮やかな小品だ。

（寺西基之）

作曲年代：1988年　改訂／1993年
初　　演：初稿版／1988年９月15日　ロンドン
マイケル・ティルソン・トーマス指揮　ロンドン交響楽団
改訂版／1993年８月25日　タングルウッド
作曲者指揮　タングルウッド音楽センター管弦楽団
楽器編成：フルート４（第４はピッコロ持替）、オーボエ２、イングリッシュホルン、クラリネット４、ファゴット２、コントラファゴット、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、ヴィブラフォン、サスペンデッドシンバル、スプリングコイル、ムチ、グロッケンシュピール、タムタム、小太鼓、テナードラム、大太鼓、でんでん太鼓、トライアングル、チェレスタ、ハープ、弦楽５部

武満 徹：
オリオンとプレアデス － チェロとオーケストラのための
(1984)

この作品は《アステリズム (Asterism)》(1968) にはじまる、「星座」のシリーズのひとつである。他の作品も、《カシオペア》(1971)、《ジェモー》(1972) 等、いずれも独奏楽器とオーケストラのために作曲されている。

この曲は、「オリオン」と「プレアデス」の2つの部分と、その2つを繋ぐ短い間奏曲から成っている。

1. Orion　Lento, quasi una fantasia
2. And　Intermezzo
3. Pleiades　Allegretto ben moderato

「オリオン」は、独奏チェロのメリスマ的な旋律が、オリオン3星に象徴される明確な線に形成されていくまでのプロセスであり、ここでは当然、「3」という数字が支配的である。

「アンド」は、カデンツァ風のパートと、牧歌的なオーケストラの交感（コレスポンデンス）が織りなす小さな間奏曲。

「プレアデス」では、この星座がつねに集合体の象徴としてあるように、「オリオン」の線に対して運動は多様であり、より色彩的である。

（武満 徹）

武満徹 (1930 ~ 96) 自身の解説にある通り、本作は「星座」シリーズのひとつ。だが、それは当初から計画されていたシリーズというわけではなかった。その起源は、尺八と琵琶をソリストに迎えた《ノヴェンバー・ステップス》(1967) の次に書かれた管弦楽曲、《アステリズム (星群)》(1968) までさかのぼる。

ピアノと管弦楽のための《アステリズム》は、ソリストに高橋悠治 (作曲家・ピアニスト／1938 ~) を想定していた楽曲で、武満自身によれば「最後に宇宙的な爆発が起き、次にそこからまた新しいものが生まれる。そういうイメージを構想」した作品だという。つまり武満にとっての天体は静的なものではなく、ビッグバンや超新星爆発のようなスケールで捉えていたことが窺える。そして何らかのプロセスの結果、最終的に別のものに転じるという構成は「星座」シリーズに共通する要素となっていく。

それに加え、伝説的打楽器奏者ツトム・ヤマシタ (1947 ~) をソリストに想定して書かれた《カシオペア》(1971) では、星座の図形や星の数、音名象徴を作曲の拠り

所とする手法を取り入れた。こうした要素を踏襲して書かれたのがハインツ・ホリガー（作曲家・オーボエ奏者／1939～）とヴィンコ・グロボカール（作曲家・トロンボーン奏者／1934～）をソリストに想定した《ジェモー（双子座）》(1972/86)、そして本作《オリオンとプレアデス》(1984) である。こうして「星座」シリーズは結果的に誕生していった。

第1曲「Orion オリオン」は、1984年にオーストリア放送協会からの委嘱によって書かれたチェロとピアノのための《オリオン》にオーケストレーションを施したもの。それゆえ、他の武満作品と比べても音数が少なめで静的な雰囲気が強い。オリオンは和名で「犂（からすき）」といい、「海を統治するはずであったスサノオの娘」のことであると武満自身が書き残している。おおまかにいえば三部形式になっており、不安定な印象をもたらす四分音（クォーター・トーン／半音の半分の音程）を交えたチェロの旋律が曲の雰囲気を作っていく。ホルンとチャイムによる和音が3回聴こえると中間部へ移り、徐々に四分音が使われなくなっていく。クライマックスへ達した後、チェロの短いカデンツァを経て、冒頭の旋律が四分音と共に戻ってくる。

第2曲「And と」は、2つの星座を繋ぐ間奏曲。チェロと管弦楽を分離させて扱っていくが、チェロの旋律は時に管弦楽に波紋を引き起こす。

そこから切れ目なく続いていく**第3曲「Pleiades プレアデス」**は、第1ヴァイオリンが主となって息の長い明快な旋律を提示するところから始まる。プレアデスの和名「昴（すばる）」には、物事をまとめる（統べる）という意味があることを鑑みれば、海を統治できなかった「犂（からすき）」と対置しようとする意図は明らかだろう。こちらも三部形式になっており、終盤に冒頭の旋律が回帰。ただし、すぐにチェロのカデンツァへと移行してしまう。最後は「オリオン」の開始音ハ（C）に収斂していく。

余談だが、同じ年に武満が作曲した黒澤映画『乱』のテーマ音楽と近似した旋律が「プレアデス」に登場するのも興味深い。あちらは映画の筋としても、黒澤と武満の仲という点でも「統べる」とは反対の離散へと向かっていったからだ。

（小室敬幸）

作曲年代：1984年
初　　演：1984年5月7日　パリ
　　堤剛（チェロ）　尾高忠明指揮　東京フィル
楽器編成：フルート３（第２はアルトフルート持替、第３はピッコロ持替）、オーボエ２（第２はイングリッシュホルン持替）、オーボエダモーレ、クラリネット３（第２は小クラリネット持替、第３はバスクラリネット持替）、ファゴット３（第３はコントラファゴット持替）、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、テューバ、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、マリンバ、チャイム、タムタム、アンティークシンバル、ハープ２、チェレスタ、弦楽５部、独奏チェロ

ホルスト：
組曲《惑星》op.32

古来、音楽は、われわれ人類の宇宙に対するロマンの中で、大きな役割を果たしてきた。古代ギリシアのピタゴラスは星々の奏でる“天球の音楽”について語り、一方、NASA が 1977 年に宇宙探査機ボイジャー1号・2号を打ち上げた際には、未知の地球外生命との遭遇を期待して、バッハをはじめとする地球上の様々な音楽を録音した「ゴールデン・ディスク」が搭載された。実際、同じ年に公開された SF 映画『未知との遭遇』では、科学者たちは音楽を使って、異星人との交信を図ろうとする。

グスターヴ・ホルスト (1874 ~ 1934) もまた、宇宙の魅力にとりつかれた音楽家のひとりだった。といっても、ホルストは宇宙について、現在の私たちと同じような克明な科学的イメージを持ち合わせていたわけではない。彼は西洋占星術に傾倒し、とりわけ、占星術の大衆化に大きな役割を果たした、20 世紀初頭の英国の占星術師アラン・レオ (1860 ~ 1917) の著作から影響を受けていた。したがって、組曲《惑星》において描き出されるのも、実際の天体のすがたというよりは、あくまでも西洋占星術の中で7つの惑星が象徴的に表す性格（例えば、火星は攻撃的、金星は美と調和、木星は快活さ、土星はメランコリーなど）であり、それらは各曲の副題に示されている。

組曲《惑星》はまた、題材のユニークさだけでなく、音楽的観点から見ても、当時の英国音楽の通念を打ち破る異色の作品となった。ホルストは組曲《惑星》を作曲するにあたって、ドビュッシーやラヴェル、ストラヴィンスキー、スクリャービン、シェーンベルクといった同時代の大陸の最先端の音楽的傾向を大胆に取り入れると同時に、4管編成の大規模なオーケストラを駆使して、斬新で色彩豊かな響きの世界を作り出した。アルトフルートやバスオーボエ、テナーテューバといった珍しい管楽器がもたらす独特の色彩感に加え、パイプオルガンと舞台裏の女声合唱は、より大きな空間性の広がりをオーケストラの響き全体にもたらしている。

こうした大胆な音楽的着想とオーケストレーションは、初演を聴いた当時の聴衆に新鮮な驚きを与えると同時に、その後、映画音楽の分野において―― とりわけ、ジョン・ウィリアムズの『スター・ウォーズ』のような、宇宙を舞台とした SF 映画の音楽に、多大な影響を残すこととなる。

組曲《惑星》は、第一次世界大戦の不吉な予感の中で着想された。全曲の中で最初に書かれたのは、**第1曲「火星」**で、第一次世界大戦直前の 1914 年6月にスケッチが完成している。「戦争をもたらす者」という副題が示すように、第1曲では、攻撃的に刻まれる5拍子の執拗なリズム・オスティナートと金管楽器によるファン

ファーレの咆哮が、戦争のイメージを克明に描き出す。それはもはや、かつての華やかで英雄的な戦いのイメージではなく、近代戦によってもたらされる破壊と恐怖を予言しているかのようだ。

第2曲「金星」は対照的に、おだやかで安らぎに満ちた緩徐楽章となる。ホルンの独奏と美しく印象的な木管の和音に始まり、中間部では独奏ヴァイオリンがロマンティックな民謡風の旋律を奏でる。

第3曲「水星」は全曲中で最も短く、「翼のある使者」という副題の通り、軽妙なスケルツォとなっている。ホルストの巧みな楽器の扱いによって、木管やチェレスタが万華鏡のように色彩を変化させながら、軽やかに旋律を受け渡していく。

第4曲「木星」は、組曲全体の中心に位置する楽章である。「快楽をもたらす者」という副題に示されるように、弦の快活なリズムにのって、ホルンが明るい力強さに満ちた主題を奏でる。作曲者は、木星とは「本来の意味での喜びのほかに、国民的な祝祭に結びつけられるような、儀式的なたぐいの喜びも表現する」ものだと語っている。この言葉の通り、アンダンテ・マエストーゾの中間部では、愛国主義的な性格を帯びた有名な旋律が、威風堂々と歌い上げられていく。

第5曲「土星」は「老年をもたらす者」である。全体に沈鬱な曲想が支配し、低音の管楽器を中心とした独特な色彩感に縁どられる。冒頭の和声主題、低弦の沈み込むような暗いモティーフ、そして金管による英雄的な主題の3つを組み合わせながら、音楽はゆっくりと進行していく。

第6曲「天王星」は、再びスケルツォ風の楽章となる。ホルストは、ベルリオーズの《幻想交響曲》の終楽章やデュカスの《魔法使いの弟子》といった魔術的スケルツォの系譜を意識しながら、飛び跳ねるようなリズムと奇怪な和声を駆使して、「魔術師」のすがたを描き出していく。

第7曲「海王星」は太陽系の中で最も遠くにある惑星である。第1曲と同じ5拍子ではあるが、全曲を通して*pp*の幽玄で神秘的な曲想が支配する。ハープやチェレスタが星々の輝きを彩りながら、ふたつのグループからなる舞台裏の女声合唱が、はるかかなたから天上の歌声を美しく響かせる。

（向井大策）

作曲年代：1914～17年
初　　演：私的な招待演奏会における初演／1918年9月29日
　　エイドリアン・ボールト指揮 クイーンズ・ホール管弦楽団
　　公的な全曲初演／1920年11月15日
　　アルバート・コーツ指揮 ロンドン交響楽団
楽器編成：フルート4（第3はピッコロ持替、第4はピッコロとアルトフルート持替）、オーボエ3（第3はバスオーボエ持替）、イングリッシュホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、テナーテューバ、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タムタム、チャイム、シロフォン、グロッケンシュピール、タンブリン、ハープ2、チェレスタ、オルガン、弦楽5部、女声合唱（「海王星」のみ）